

はるか なり

吉田 比砂子 著

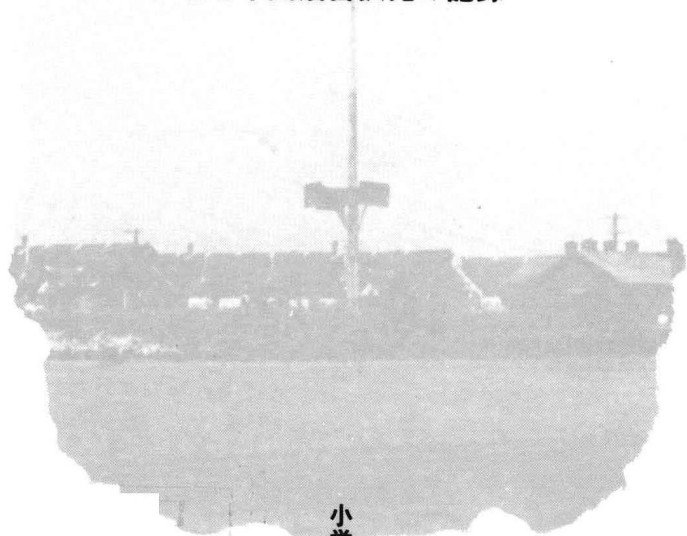
ある中国残留孤児の記録

小学館

「はるか なり」

吉田比砂子一著

ある中国残留孤児の記録



小学館

吉田比砂子（よしだ ひさこ）

1924年、岡山に生まれる。東東府立第一高女を卒業。日本児童文芸家協会々員。主な著書に「雄介の旅」「目が見えなくても」（講談社）「マキコは泣いた」（理論社・小学館文学賞受賞）「しずこのせんそう」（小学館）など。現在日中友好残留孤児虹の会の会員としてボランティア活動に従事。

東京都日野市平山 6-37-8

はるかなり

ある残留孤児の記録

定価九八〇円

一九八七年八月二〇日 初版第一刷発行

著者 吉田比砂子

発行者 相賀徹夫

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一（〒一〇二）

電話 東京〇三（三三〇）五四五〇（編集）

東京〇三（三三〇）五三三三（業務）

東京〇三（三三〇）五七三九（販売）

振替 東京八一二〇〇

印刷所 株式会社 東京印書館

*製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

*本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。



▲開拓団の団員たち。

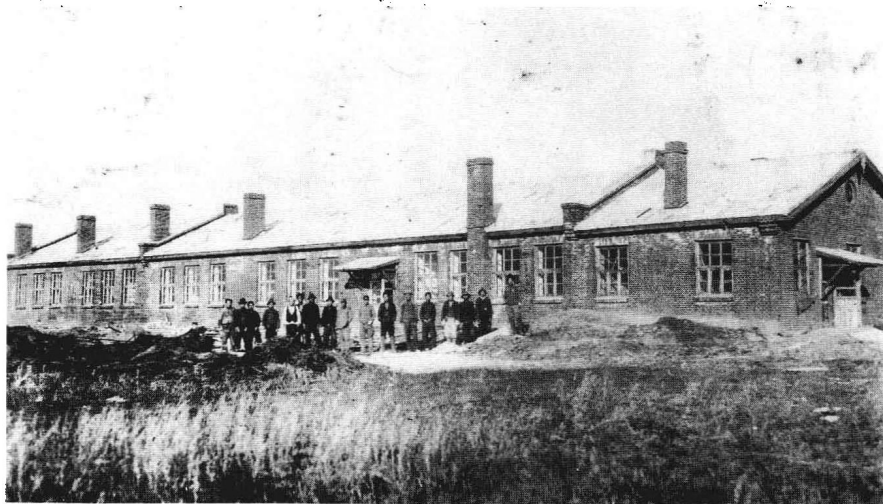


▲開拓団の稲刈り風景。

▼義合国民学校全景。



▲竜河省甘南県の義合開拓団。
(昭和16年)





▲やゑさんの父、赤塚庄平さん。(昭和17年)



◀左写真の上から

父の兄、赤塚常松さん。

(昭和19年)

やゑさんと四女真美子ちゃん。(昭和48年)

下の妹、久子さんと末っ子の俊子さん。

(昭和48年)

昭和16年、日本で
撮影した最後の記
念写真。父母と子
どもたち。やゑさ
んは左から三人め。



◀義合国民学校の
先生と生徒
たち。
(昭和19年)



◀開拓団の婦人
会と子どもた
ち。(昭和18年)

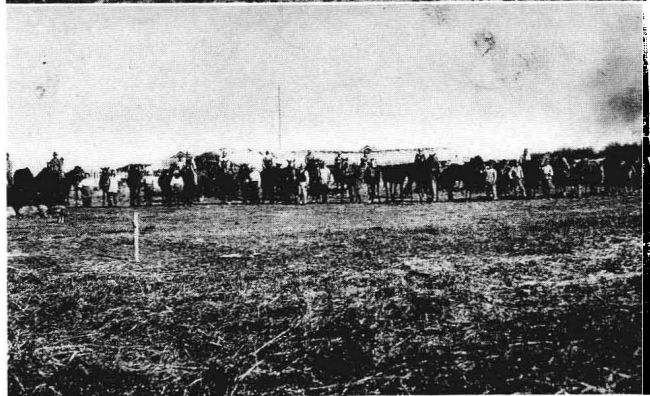
▶ やゑさんの父の兄、
赤塚常松さん一家。
(昭和16年)



▶ 常松さんの家族と飼
っている動物。
(昭和19年)



▶ 義合開拓団の馬の検
査風景。(昭和19年)



は
る
か
な
り

ある
殘
留
孤
児
の
記
録

運命を翻弄された者の記録

三木 卓

(作家)

一九四五年から四六年にかけての冬を、わたしは長春市ちょうしゆふじんですごした。父親がこの町で新聞記者をしていたからである。わたしは小学校四年生だった。

満州国が崩壊ほうかいしたあとの中国東北は内戦状態で、ソ連軍が撤退てつたいしていたあとは、中央軍（国府軍）と八路軍がたたかっていた。一般民衆は庇護ひごもなく、自分で自分を守って生きるよりない。日本語新聞が閉鎖へいさされたあとわが家も収入がなくなったから、こどもであるわたしや兄は、

街頭へ出て古本を売ったり、煙草たばこを売ったりしてわずかな収入しゅうにゅうを得た。

ものを売って金を得るのは、日本人はみなしたことである。そういう者同士が、市場や街頭で出会ったりした。

売るものがある者はしあわせである。長春に住んでいてそこで終戦を迎えたものは、ともあれ何か持っていた。けれども、奥地で終戦を迎え、何もかもほうり出して逃げるよりなく、やっとたどりついた長春で冬をこした難民とよばれた人々は、たいへんだった。かれらも机つくえのひきだしなどをさがしてきて、それに餅もちや大福だいふくをならべて売っていたりしたが、寒さのなかでひどい身なりをしていたから、すぐにわかった。そして、売るためにけんめいで、窮状きうじょうを切々と訴うたえた。ひとつの飴あめも売ることができず、仮宿舎へ向かって去っていった中年の女性の、さびしい背中を今も思い出す。

中国残留孤児とやがて呼ばれることになることもたちとは会ったことはなかった。そのほとんどが、長春よりソ満国境に近いあたりで起った

ことだからである。わたしが出会ったこどもたちは、一応のところその局面をなんとかきりぬけて生きのびてきた者たちだった。一応のところ、といったのは、それからも沢山のこどもが帰国することができないで死んでいったからだ。大人の死者も多かったが、それ以上にこどもの死者は多かったはずである。あの年、生きのびることの出来たこどもは、まだ、それだけでもしわあせだったというべきかもしれない。

中国残留孤児というと、わたしが思い出すのは、こうした長春の難民の光景である。残留孤児は、その地平の彼方かなたにいる。わたしは首都の長春で終戦を迎えることができたから幸運だった。そのことは忘れようにも忘れることのできないことである。

力の弱いものほど、政治の支配をまともにうける。国家は兵卒へいそくをあつめるのに薬書一枚だせばよく、その薬書はただちに一人の民衆の運命を変える。満州への移民もそうだった。そしてその人々のこどもたちは、もっと力の弱い者であり、こどもたちの運命は、支配の破綻はたんのさまをい

っそう無惨な形であらわした。中国残留孤児の問題は、その典型的な場合である。

吉田比砂子さんの「はるかなり」は、赤塚やゑさんという、北関東の農村出身の女性の運命をたねんにたどることで、そうした問題をあぶり出している。わたしは中国残留孤児にはならないですんだけれども、同じように政治に個人の運命を翻弄されて生きてきた植民者庶民の一人として、とうてい他人ごととは思われなかった。そして口惜しいという気持ばかりがやってくるのだった。

二度とこんな目に会いたくないし、また会わせたくない、と思う。それはそうだが、しかし会わされてしまった人は、それをひきうけて生きるよりない。そこでがんばるよりない。だから、この本に出てくるみなさんにも、どうかしつかり、という気持でいっぱいである。それぞれが充実した生を生きぬいて、見返してやろう。なんとしてもそうしようではないか。

表紙 寫多 圭介

写真・攝影 木内 博

提供 共同通信社

毎日新聞社

は
る
か
な
り

ある
殘
留
孤
児
の
記
録
／
目
次

運命を翻弄^{はんろう}された者の記録

三木卓……………6

(1) 赤塚やゑさん……………14

(2) 「日まわりの旗」に送られて……………23

(3) 甘南^{かんなん}の四季……………36

(4) 日本は、負けた……………52

(5) 茶わんや箸^{はし}まで奪^はわれて……………68

(6) 悲劇のかずかず (1) (満州開拓史より)……………84

(7)	何地主の家で……………	99
(8)	悲劇のかずかず (2) (満州開拓史より)……………	113
(9)	父の死……………	120
(10)	母の死……………	132
(11)	文化大革命をこえて……………	142
(12)	父よ、母よ、安らかに……………	155
	著者 あとがき……………	166
	旧満州国開拓団跡地(地図)……………	170

(1) 赤塚やゑさん

昨日とはうって変って、寒さきびしい二月十五日です。それでも、やや曇り、というていどの天候ですから、この日曜日、町は家族づれでにぎわっていました。

午前九時、東京の京王線（新宿駅）のパンダ小屋（張り子のパンダが置いてある）前に、赤塚やゑさんにもにこにこと、二十五人の家族にかこまれていました。

やゑさんは、孫が九人もいる五十三歳、七年前に中国人の夫を失い、その後昭和五十九年三月に、中国から日本に帰ってきました。

旧正月を祝う『中国帰国者の会』の新年会が、東京池袋の勤労福祉会館であるのです。

旧正月は、日本でも地方へいけば祝います。しかし中国では全国的に、新暦正月よりも旧暦正月のほうを「春節」として祝う風習があります。今年、昭和六十二年の旧正月は一月二十九日でしたから、皆が多く集まれる二月十五日の日曜日に新年会となりました。

「村田さんと遠田さん、どうしたのかなあ。」